
仮面のメイドガイの二次創作を読みたいけど誰も書かないから俺が書いてみた！

ディルムッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面のメイドガイの二次創作を読みたいけど誰も書かないから俺が書いてみた！

【Nコード】

N1771Q

【作者名】

ディルムツド

【あらすじ】

『仮面のメイドガイ』の二次創作です。主人公はフブキの妹に転生します。家事スキル持ちですが、戦闘スキルは持っていません。最近うっかりスキルを身につけました。コガラシはオリ主に手綱握られています。
注意）本作でのフブキは微ヤンデレ化しています。耐性の無い方はご注意ください。

こんなフブキは俺のフブキじゃない、などの苦情は受け付けません

ので悪しからず。

ブログ（前書き）

まだまだ初心者ですが、頑張って更新していきます。

プロローグ

.....

.....

私…… 寝てるの……

ズキッ！ う、頭が……

【やっと起きたようじゃの】

声が聞こえる……どこから……

わからない……

【ふむ、まだ魂が定着しておらんようじゃな】

たましい…タマシイ………なんのこと………

【ほれ、いい加減起きんか。】

おきる………起きる。どうやって…

【ゆっくり、目を開けるんじゃ。さあ】

目を開ける…目を…

ゆっくりと目を開ける。

目に入るのは…白、真っ白な空間。

【ふむ、無事起きられたようじゃの。
魂も定着したか】

声が聴こえる…どこから…

ゆっくり 首を回し 周りを見る。

姿は…見えない。誰も…いない。

【ああ わしの姿はそなたには、見えんよ。それより 身体におかしいところはないか？】

身体…私の身体。腕は、動く。指も、開く。

床(?)に手をつき、上体を起こす。

自分の身体を見てみる。

足もついてる。特に目立った傷もない。

【どうやら、問題は無いようじゃな】

「あ、はい。……あの、ここは。私はいったい…」

【うむ、順番に説明しようかの。】

私は黙ってうなづく。

【まず、ここは幽界じゃ。あの世とこの世の狭間の世界じゃ。】

ゆうかい？

【わしはこの管理人を努めている。】

管理人……

【そして、お主は一度死んだのじゃ。】

死んだ……私が…

【通常死んだ人間は一旦ここに留まり、その後あの世へむかい、次の転生に備える。】

転生……

【魂とは、永遠不滅なのじゃ。人は死に、生まれ、生きて、やがて

死ぬ。】

魂… 生きる…死…

【その魂を管理するのが、わしの役目なのじゃが…】
ん？

【お主、何者じゃ？】

何者？

何のこと？

【異世界の管理人から連絡があった。お主に新しい身体を与え、こちらの世界に転生させて欲しいと。】

……………

【こんな事態はわしも初めてじゃよ。】

異世界……

【まあ、あちらにも事情があるのじゃろう。そういう理由で、お主にはあちらの世界に転生してもらう。】

はあ…

【む、あちらの世界に行く準備ができたようじゃ。では、新しい人生も頑張って生きよ】

むう。まだ、はっきりと把握できていませんが、生きろというなら、生きますか。

【あとあちらの世界じゃが『仮面のメイドガイ』の世界だそうじゃ。
】

は？

仮面のメイドガイ？

.....

.....

.....

な、なんです~~~~~~~~~

プロローグ（後書き）

主人公はフブキさんの妹に転生します。物語は原作開始時点よりスタートします。

ご奉仕 そのいち 自己紹介なのですよ（前書き）

恥ずかしながら書いてみました。短いですが、楽しんでいただければ幸いです。

ご奉仕 そのいち 自己紹介なのですよ

皆様 はじめまして 私 こなゆきと申します。今 流行りの転生オリ主…なのですよ。

転生先の世界は『仮面のメイドガイ』 前世では原作漫画を楽しく読んでいたのですが、まさか自分がその世界に転生するとは…

私は原作の主要登場人物の一人であるフブキ（ドジっ娘メイド）の妹に転生しました。詳細は省きますが、物心着いた時から、メイドとしての訓練を積んだのですよ。お陰で、現在（17歳）家事スキルはかなりのものだと自負しております。ちなみに姉と違い、私にドジっ娘属性はありません。ええ、ありませんとも！

フブキ姉さま

は普段はしっかりした尊敬すべきメイドなのですが……

あれは最早呪いのレベルですね。（某運命の赤い悪魔レベル）

ただ、あのスタイルの良さは……

原作では、たしか遺伝と云っていましたが、では私の場合は……

やはり転生では、遺伝の恩恵は受けられないようで。

まあ、その話は置いといて。

この世界に転生して、私会いましたよ。会ってしまったのですよ。

歩くセクハラ魔神。デフォルトでチート。人外の化物。

そう！ メイドガイ コガラシ氏に！ （ババーン）

いやーインパクトありましたですよ。

残念ながら2、3度しかお会いできませんでしたが、それでも十分でしたよ。

あの人はその人外っぷりがどうしても目立ちますが、基本的メイドスキルも非常に高いですよ。

姉さまも文句は言いつつ、信頼はしているようでした。

そういえば原作でも ちょっといい仲だったような気もしますが…

まあそんなこんなで、この世界を生きてきた私ですが、本日姉さまより新しい仕事を命じられました。

私立秀峰制覇学園高校二年 富士原なえか様へのご奉仕。

原作介入ですね。どうもありがとうございます。

正直 原作がハチャメチャだけに、原作知識がどれだけ役立つかわかりませんが、

精一杯頑張ってご奉仕するといたしましょうか。

ご奉仕 そのいち 自己紹介なのですよ（後書き）

次回から本格的に物語開始です。

ご奉仕 そのに

原作開始なのですよ(前書き)

短いですが、投稿します。

ご奉仕　そのに

原作開始なのですよ

「一本！　勝負あり

白

富士原」

皆様　こんにちは　こなゆきです。そうそう、皆様から質問される前にお答えしておきます。それは何故姉の「フブキ」がカタカナで、妹の私「こなゆき」がひらがな　なのかということです。それは、何故かというところ・・・

『ひらがなのほうがかわいいからです』

何だ、そんな事…とおっしゃらないでください。女の子にとって、可愛いのは正義なのです。第一考えてもみてください。カタカナで、「コナユキ」・・・男の子っぽいじゃありませんか！

ただでさえ、姉様と比べ　女らしさが足りないというのに…

「見つけたぞ

あの小娘が俺の・・・」

ムッ、コガラシさんがなえか様を認識したみたいですね。

おう、そういえばまだお伝えしていませんでした。

現在のはまさに、原作の開始時点。なえか様が出場している剣道大会

が行われている体育館です。今私は、フブキ姉様、コガラシさんと並んで体育館を見下ろしております。……いや、ここ何処です？ 恐らく放送室（？）の上だと思うのですが。高いですよ！ 屋根すぐそこですよ。人目につかないようにとのことなのでしょうが…

ヒュッ

パッ

タアンッ

キヤー ギヤー うわあああああつ

ふむ、相変わらず コガラシ氏の投げナイフは正確ですね。なえか様の後輩さんでしょうか？ 女の子が渡そうとしたスポーツドリンクの真ん中を見事に貫いてますね。

「ど…どうした？ 何…」

フッ

ズダーン

キャアアアア

フブキ姉様の吹き矢もさすがの精度ですね。大会役員の方でしょうね。なえか様に近づいた男性の首筋に見事命中してますね。

え、お前は何もしないのかって？

私は、格闘系スキルは持ち合わせていないのですよ。主に家事専門メイドですから。

この後のなえか様 幸助様のお家を掃除する際には、存分に力を振るうですよ。

しかし、体育館は大騒ぎですね。ちょっと申し訳ない気もしますが、なえか様の今後を考えれば、この程度という言い方もできますね。

私、この世界に染まって来てますね。まあ良いでしょう。それでは、

お家の掃除に向かうといたしましょう。

ご奉仕 そのに

原作開始なのですよ(後書き)

次回、なえか 幸助と会います。明日更新予定です。

ご奉仕　そのさん　初めまして　ご主人様　なのですよ（前書き）

ようやく　主人公と対面です。

ご奉仕　そのさん　初めまして　ご主人様　なのですよ

皆様、こんにちは。こなゆきです。さて、これからなえか様たちのお家の掃除に向かう訳ですが…

その前にやることがあるので。それは、女子更衣室に忍び込んでなえか様のバッグに新品のブラジャーを忍ばせてくる、

というものです。…いや、何です、これ？　実行者はコガラシさんですけど、フブキ姉様も止める様子ありませんし。

何の意味があるのでしょうね、これ？　コガラシさん的には、当然のご奉仕なのでしょうが…

え、私ですか？　いや、私は屋根裏になんて忍び込みませんよ。体育館の外で二人を待っています。別に一緒に忍び込む必要もないでしょう。いや、考えてみれば、さっきもあんな高い場所に私も一緒に行く必要無かったのでは？

ちなみに、さっきはコガラシさんの肩に乗せてもらいました。自力では、とても…

「こなゆき」

お、フブキ姉様とコガラシさんがやって来ました。無事潜入ミッシヨンを終えたようですね。

「お待たせ。早速なえか様たちのお家に向かいましょうか」

「クッククク　さあ　行くぞ。チビっ娘メイド」

「……ええ、行きましょう。姉様　コガラシさん」

そうなんです。コガラシさんは、私の事を名前で呼ばす、チビっ娘メイドと呼ぶのです。

まあ、確かにコガラシさんは人の事を名前で呼ぶことは滅多にありませんが。

実際、私も女子としても背の高い方ではありませんが。

「くくく、どうした。チビっ娘メイド　緊張しているのか？」

家に向かう途中、コガラシさんが私に話しかけてくれました。意外にきさくなんですよね。この方。

「ええ、大きな仕事ですから、いささか。」

「くくく、心配は無用だ。このメイドガイあるかぎり、どんな任務も失敗などあり得ん。」

相変わらず自信満々ですね。まあ、頼りにさせていただきますか。

姉様に目を向けると、黙ったままニコッと微笑まれました。自分もいるから、安心しろという事でしよう。

まあ、ひとつ気合い入れて頑張りますか。

………

.....

.....

そう思っていた時期が私にもありました。

今、なえか様たちのお家の前に着いたのですが、いや、何ですか、これ。

二階の窓からは、壊れた電化製品やタンス、破れたシート、洗濯物が溢れ返ってますね。

今、落ちてきたのは、電子レンジでしょうか。

中庭には……それに加えて、生ゴミでしょうか？ 一応黒いゴミ袋に入っているようですけど。

こっちは、古新聞や雑誌でしょうか。紐で縛ってはあるんですね。

おっと、足元をゴキブリが。栄養しつかり摂ってるんでしょうね。ちよっと大きいですよ。

空を見上げれば、カラスが20〜30羽はいますかね。おう、中庭ではカラス、野良猫、ネズミの三つ巴の争いが。

更に家の中からは、複数の動物の鳴き声が。

帰って良いですか？ いや、分かってはいたんですよ。ゴミ屋敷だという事は。

ただ、やっぱり現実は違いますね。何が酷いって、臭いですよ。臭い。原作読んでる時は、わかりませんからね、これは。

う、ちょっと頭クラクラしてきました。

「あらあら、なかなかのお家ですね。」

「ククク、腕が鳴るな。ご奉仕しいがありそうだ」

……頼もしいですよ。ええ、本当に。

コガラシさんは姉様と簡単に打ち合わせをした後、家の中に入っていきました。動物の駆除ですね。

「では、こなゆき。私達は玄関と台所周りをかたずけましょう。すぐに、御前様がいらっしゃいます。急ぎましょう」

はあ、やるしかないんですね。覚悟を決めましょう。女は度胸なのです。

.....

.....

.....

な、何とか間に合いましたね。原作では、フブキ姉様1人で、これ
を終わらせたんですよね。改めて尊敬しますよ、うちの姉様。

「こなゆき、さあ 新しいご主人様をお迎えしましょう。」

「はい、フブキ姉様」

さて、ようやくなえか様と対面ですね。人間 第一印象が肝心です。
疲れた顔など見せるわけにはいきません。

玄関で、フブキ姉様と待っていますと、外から御前様の声が聞こえ
てきました。

「フブキ、こなゆき出でよ」

フブキ姉様がドアを開け、なえか様たちに挨拶されます。

さあ、次は私の番ですね。

「もう1人 ご紹介させていただきます。こなゆき」

フブキ姉様が私を見て、そっと微笑んでくれました。私も姉様にそっと微笑みかえし

姉様の横に立ち、背筋を伸ばし、足元を揃え、口元に微笑みを浮かべながら、

なえか様 幸助様に視線をまっすぐ向けて、挨拶します。

「初めまして なえか様 幸助様」

「本日よりこちらでご奉仕させていただきます」

「ハウスメイドのこなゆきです」

ご奉仕　そのさん　初めまして　ご主人様　なのですよ（後書き）

なんか、打ちきりエンドっぽい終わり方ですが、まだ終わりません。
未熟な作者ですが、これからも更新していきます。

ご奉仕　そのよん　出来るメイドは……なのですよ（前書き）

何とか書き上げましたので更新します。

ご奉仕　そのよん　出来るメイドは……なのですよ

皆さま　改めてましてこんにちは　富士原家のメイド　こなゆきです。

只今　私の家で掃除の続きをしております。いや、別に罰を受けてる訳ではありませんよ。自分から進んで行っているのですよ。

え、何故そんな事をしているのかって？それは私が原作知識持ちの転生者だからですよ。つまり、この後起こるであろう事態に備えているのですよ。

この後の展開をかいつまんで説明いたしますと…

〔1〕　コガラシさんとなえか様が出会う。

〔2〕　コガラシさん　なえか様の制服のボタンを切り飛ばし、下着姿にする。

〔3〕　ブラジャーをチェックし、洗濯の仕方を注意する。

〔4〕　コガラシさん　更衣室に忍び込み、なえか様のバッグに下着を入れた事を告げる。

〔5〕　コガラシさん　なえか様にブラジャーを洗ってやるから脱げという。

〔6〕　なえか様　キレル。

以上の展開が起これと予想される訳です。

え、事態に備えるなら、家の中にいた方がいいんじゃないのかって？

何を言うのです。私が家の中にいたって騒動は起きますよ

……………あ、石を投げないでください！ 私の話も聞いて欲しいのですよ！

そもそもですね、この世界にコガラシさん有る限り 騒動が起きない筈がないのですよ。

フブキ姉様でさえ、騒動を起こさせない事は無理なのですよ。起こってしまった後から、撲殺するのが、精一杯なのです。

戦闘スキルもない私には、どうすることも出来ないのですよ。

ですから、私は私に出来る事を頑張るのですよ。

まず、今回はフブキ姉様たちが追い出されたあと、なえか様たちを説得しようかと、思うのですよ。

勿論、私が何もしなくても 私達はこの家でご奉仕する事になるのでしょう。

ですが、なし崩しで一緒に住むよりは、きちんと話をして 渋々でも納得してもらった方が気持ちいいではないですか。

小さな事からコツコツと、なのですよ。

さて、そろそろなえか様が爆発する頃でしょうか。

「でてけーーーーー!!!!」

ガラガシャーーーーーン

ギヤア ギヤア ギヤア

おう、グッドタイミング。予想通りなえか様が爆発したみたいです
ね。

キッチンにあったものでしょうか、椅子や机が空を飛んで行きます
ね。

屋根に止まっていたカラスも逃げだしてますね。

「な……なえか………うおお?！」

ドカツ

「ゴゼン様?!」

うわ、御前様が避けてなかったら刺さってましたよ あの包丁。

フブキ姉様も珍しく慌ててますね。

そつと玄関を覗くと…

うわ、半裸の女子高生が包丁持って 涙目で睨んでいます…

幸助様が青い顔で右手を押さえてますけど…

ちょっとした衝撃映像ですね、これ。

説得…もう少し時間を開けてからにしましょう。

出来るメイドは危うきに近寄らず、なのですよ。

ご奉仕　そのよん　出来るメイドは……なのですよ（後書き）

なかなか展開進みませんが、これからも地道に更新していきます。

ご奉仕　そのご　説得は心を込めて…なのですよ（前書き）

何とか、原作一話分終了です。

ご奉仕　そのご　説得は心を込めて…なのですよ

皆様　お久しぶりです　こなゆきです。

只今　フブキ姉様と打ち合わせ中です。

「では、こなゆき、あなたはそのまま残るのですか？」

「はい　姉様。このままでは、誰にとってもよろしくないでしょう」

なえか様たちの家を振り返ります。

既に玄関は閉められており、お二人は家の中に戻られたようですね。

「私達はこれから共に暮らしてゆくのです」

「ですからまず落ち着いた状態で、キッチンと話をしなくてはいいけないと思うのですよ」

ここで、ちよつと声を潜めて、

「只でさえ、コガラシさんの件で第一印象最悪なのです。多少なりともフォローしなくては」

姉様と二人でコガラシさんを見る。

例の高笑いをしながら御前様の頭を片手で掴んで、持ち上げてます。

自分に任せれば安心だと、言ってるようですが…あ、振り回し始め

ました。

「「はあ」」

姉様と顔を見合わせ、二人で溜め息をつきます。

「そうですね。あの男の手綱は私が握ります。こなゆき、なえか様たちは」

「はい、私にお任せ下さい」

姉様がニコリと笑って、コガラシさんたちの方へ向かいます。

さて、では私はなえか様たちとお話してまいりますか。

「正直 僕等もう限界だよ」

家の中に入り、キッチンまで行きますと、幸助様の声が聞こえて参りました。

フム、ちょうどなえか様の説得中でしたか。

ちょうどいいですね。ではご主人様たちに挨拶すると致しましょうか。

「なえか様、幸助様 失礼いたします」

「だ、誰？」

「あ、君はさっきのロリっ娘メイドさん！」

幸助様 後でお話があります。ですが、今は…

「お許しも得ず、お二方の前に参りました事ご容赦ください」

姿勢を但し深々と一礼します。リアクションは…無いですね。

まあ無理もないでしょう。昨日まで一般人をやっていて、急にメイドが現れ敬語で話し掛けられれば、そうなるでしょう。

無論それが狙いですが、何か？

交渉は最初が肝心ですからね。

「ですが、お二方にどうしても申し上げたい事がありまして、こうして参りました次第です」

「え、えと」

「すごい…出来るロリっ娘メイドさんだ」

なえか様はまだ動揺してますね。幸助様、私あなたより年上ですよ。

「まず、お二方が今まで通り、お二人だけで生活する事は不可能です」

「なっ！」

なえか様が反論したそうですが、ここは一気に押しきりましょう。

「客観的事実としてお二方は未成年です」

「うっ」

「当然、この家の法的所有者でもありません」

「それは」

「御両親は不在、故に後見人は祖父であられる御前様、ということになります」

「………」

「その御前様がお決めになられた事です。我々をこの家に派遣する」と

「ま、待ってよ」

「はい、何でしょうか」

なえか様と正面から向き合う。

「た、確かにお爺様が決めた事かもしれないけど」

「……………」

「私は、私達は二人でやってきたの。これからもやっていくの」

「いや、姉さん 僕は…」

「幸助は黙ってて！」

「はい…」

なえか様が幸助様を一喝した後、私の方へ向き直りました。

「だいたい、何なのよ あの男は！」

コガラシさんですか…

「更衣室に忍び込むは、人のバッグに下着を入れるは、挙げ句の果てに私にぬ、脱げって」

むう…確かにやり過ぎは否めませんね。あの方、全くデリカシーというものがありませんからね。そのくせ、貞操観念は古いものを持つてるんですね。

「あんなのと一緒になんて暮らせるわけないでしょ。私、何されるか分かったもんじゃないわよ」

「その点をご安心ください。彼は最優のメイドガイ、主に対し不埒な真似をする事は決してありません」

そもそも、あの方性欲とかってあるんですかね？

「そ、そんなこと言ったって」

「万が一にも、なえか様に貞操の危機が訪れる事はありません。それに姉であるフブキや私も共にお仕えます。ご安心を」

ここで、再び一礼。丁寧なお辞儀って、ときにはそれだけで武器になるですよ。

「うっ、で、でもやっぱり」

フム、ではここらでとどめを。

「それに、なえか様♪」 ニッコリ 極上スマイル。サービスなのですよ。

「な、何」

「ぶっちゃけ、この家 人が住める状態じゃありません」

ピシッ お、固まりましたね。

「この台所を見て 何もお感じになりませんか？」

「う・・・」

ぐるツと台所を見渡します。

「今は玄関周り台所だけですが、私達にお任せいただければ、家中全てをこの状態に致します」

「………」

幸助様が目をキラキラさせながら私を見えています。まあ、メイドさんが家に住むうえ、あの状況からの解放ですからね。

「当然、その状態を維持し続けます」

「無論、掃除に限らず家事一切はお任せください」

「あ、う」

では、最後の一押しを。

「なえか様、御前様はお二方の幸せを祈っていらっしゃるのです。」

「………」

「ご不快かもしれませんが、私達誠心誠意なえか様 幸助様にお仕えいたします」

「………」

「私達のご奉仕受けていただけませんか」

ここで三度一礼。なえか様のお言葉を待ちます。

「姉さん」

「幸助…」

「ここまで言ってくれてるんだ。おいてあげようよ」

「そ、そんなこと言われても」

フム、どうやら決まりですかね。やはり人間同士、話せばわかっ…

よろろっ

とんっ

みしっ

みし みし みし ぱき みし みし

べきっ みききっ

みしみしみしみしみしみし

「!？」

「え？」

聞こえてくる音に、思わず顔を上げます。

えーと、なえか様が後ずさって、襖に当たって、向こう側の部屋に

押し込んだままのゴミやガラクタが、そのちょっとした刺激で、襖を突き破って此方の部屋に雪崩れ込もうとしているわけですね。わかります。

ハッハッハ すっかり忘れてましたね。この原作イベント。いや、私の原作知識もあてになりませんね……………って、

「世話の焼けるご主人め！」

「うわーっ　ねーちゃんーん」

「とっとと助けんか　馬鹿者おっ」

「こなゆき！　無事ですか？　こなゆき！」

「あうう（＊―＊）」

……襖を突き破ったガラクタが台所に溢れだしたみたいです。ただ今、わたしとなえか様は絶賛その下敷き中で、救助を待っている……わけですね。ハッハッハ、はぁ…

……皆さま　私　このような不出来なメイドですが、宜しければこれから暫く私の物語にお付き合いです……ガクッ。

ご奉仕 そのご 説得は心を込めて…なのですよ（後書き）

作者（以下 作） 「皆さま 私の駄作をお読みいただき…」

こなゆき（以下 こ） 「こら！ 非道作者！」

作 「私の駄作を…」

こ 「駄作なのはわかっています！ 極道作者」

作 「うるさいな なんだよ」

こ 「なんだよ、ではありません。何ですか、あのラストは」

作 「原作第一話のラストだろ」

こ 「それはわかってます。私が聞きたいのは、何故そこに私が巻き込まれていますか！」

作 「何故って…そうしたかったから？」

こ 「疑問系！ おかしいでしょ！ 私主人公ですよ！」

作 「いや主人公だったら尚更じゃない。原作のなえかを見ろよ」

こ 「うぐ、それを言われると。で、でも巻き込まれ型じゃなくて、傍観者の立場の主人公でもいいじゃありませんか。二次創作なんだし」

作「それじゃ詰まらんだろ……俺が（ボソツ）」

こ「お前かあゝゝゝ」

作「まあ、そんなわけでこれからも…待て、なんだそれ」

こ「ふふフ いいんですよ 逃げなくて」

作「待て、落ち着け。まずその右手に持ったバールのようなものを置け」

こ「大丈夫ですよ、あなたのその腐った脳をかき混ぜて、少しマトモにして差し上げますから」

作「待て！ 話せば解る！」

こ「問答無用！ 天誅！！」

作「ギャアアアアアアアアアアアア！?!」

ご奉仕 そのろく 朝は戦争…なのですよ（前書き）

週末投稿予定でしたが、かきあがったので本日更新します。

ご奉仕　そのろく　朝は戦争…なのですよ

皆さま　ジリリリリリリリ

改めまして　ピピッピピピピピピピ

よろしく願いします　ポッポー　ポッポー

こなゆきです。リンリンリンリンリン

えー只今朝の7時、なえか様のお部屋の前に居ります。

目覚まし時計が、けたたましく鳴ってますね。

ただなえか様　全く起きてこられる気配ありません。

私も朝強い方ではないのですが、ここまでは…

さて、こうしていても仕方ありません。なえか様を起こして差し上げるとしましょうか。

「なえか様　失礼いたします」

部屋に入ると、うわ、一層音が響いて来ますね。

なえか様は、

「すやすや♪」

はい熟睡中ですね。どうもありがとうございます。

うーむ、しかしよくこの状況で眠れますね。

ある意味、尊敬できますが…

「ウーン」

あ、寝返りって見てる場合ではありませんね。

「なえか様 おはようございます」

「むにゃむにゃ」

「なえか様 もう朝ですよ」

「すやすや」

「なえか様 学校に遅れますよ」

「にゅう」

「なえか様 そろそろ起きていただかないと、大変な事が起き
ます
が」

「ぐるぐる」

「クッククク 苦戦しているようだな
ちびっ娘メイド」

ああ、来てしまいましたか。

「この状況で起きんとは、見上げたご主人よ！」

「えー コガラシさん 一つ確認したいのですが、その手にお持ちのそれは」

「クッククク ご主人に爽やかな朝を届けてやろう。メイドガイの名に懸けて」

聞いてませんね。コガラシさんも気合い入ってるんですかね。

まあ、見れば判りますけど…

庭に有った水撒き用のホースですよ、それ。

しかも、ホースは延々部屋の外まで伸びて、恐らくいや、間違いくお風呂場の蛇口に繋がってるわけですね。

「いいだろう！」

ぐいっ

「ん」

ぴくん

ぬぼっ

遠慮も躊躇も無く、なえか様のパジャマの中に、ホースの先を入れ

ました。

具体的に言うと、胸の谷間です。

いやしかし、本当に大きいですね。

なえか様の胸。

「う、ん」

お、寝返りをうって横向きになった為、さらにしっかりと挟み込みましたね。

これは、なかなか外れませんよ。

うーむ、本当に見事な胸ですね。

「メイドガイの真の力 見せてくれる！」

きゅっ

ゴポッ

ゴポポッ

おっと、見とれている場合ではないですね

コガラシさんが、とうとうコックを開けました。

さて、では水が昇ってくる前に部屋を出ていきますか。

え、薄情じゃないかって？

違いますよ、何を言うのです。

私はお風呂場に水を止めに行くのです。

決してあのまま、なえか様の部屋にいたら自分まで巻き添えで濡れるから、それを嫌った為、ではありませんよ。

ヒヤアアアアアアアアアアアアア

む、乙女の悲鳴。水が昇りましたか、いざお風呂場へ。

急いで階段を降り、お風呂場に辿り着き蛇口を締めます。

ウワハハハハハハ

おもい知ったか ご主人く

ドスーン

ガラガラドーン

ああ、何とか無事（？）水も止まったみたいですね。

.....

.....

.....

あれ、何も起きませんね。

確か、原作ではなえか様がコガラシさんを二階の窓から突き落としたりした筈では？

ん？ 突き落とすって…どうやって？

素手じゃ…まだ無理ですよ。

竹刀…は、確か部屋には無かったはず。

あれ？

ちょっと原作を思い出してみよう。

ウーン…と、そうか。

原作では、誰も水を止めなかったから、なえか様はホースから出たままの水で突き落としたんでしたね。

いやー 思い出したらスッキリしました。ハッハッハ。

あれ？

にしても、静かですね。

なえか様だったら突き落とさなくても、とりあえずは怒鳴りそうなものですが。

でも、二階からは：

な、なえか様

シツカリなさってください！

ム、これしきで気絶するとは軟弱なご主人め！

ね、姉ちゃーん ！

………

………

………

あ、朝御飯の用意をしなくては。

出来るメイドは朝から、それはもう大忙しなのですよ。

…なえか様、ごめんなさい。

ご奉仕 そのろく 朝は戦争…なのですよ（後書き）

作者（以下作） 「皆さま 本日は私の作品を…」

こなゆき（以下こ） 「こら！ ゾンビ作者」

作 「また、お前は邪魔をする。今、読者様に挨拶を…」

こ 「挨拶なら私が行います。

皆さま 本日はこの駄作者の駄作品をお読みいただき まことにありがとうございます」

作 「お前、その作品の主人公だろ…」

こ 「今後も、私がこのアホ作者のお尻を叩き、作品を書かせますので、どうぞ末長くよろしくお願いいたします」

作 「……………」

こ 「ほら、あなたも挨拶しなさい
社会のゴミ」

作 「…ええ、私の作品を読んでいた全ての読者様に感謝しています。

本当にありがとうございます」

こ 「フム、やれば出来るじゃないですか。

さ、ではOHANASHI しましょうか」

作「待て、なんでお前そんな戦闘態勢なんだよ」

こ「ほほう、身に覚えがないとでも」

作「え、まさか今回のラストか？ あれお前のせいだろ」

こ「う、うぐ…それは。」

いや、書いてるの貴方でしょ」

作「それがなあ、僕 勘違いしてたんだよ。初めてつきり なえかは竹刀で突き落としたと思ってたんだよ」

こ「ほ？」

作「そう思って、お前を風呂場に行かせて水を止めさせたんだけど、よく原作よんだら
ホースの水を使ってたんだよ」

こ「……………」

作「それで、辻褄合わせるためになえかに気絶してもらったんだよ。まあ、結果として原作と違う展開になったけど、これはこれでアリかなと」

こ「一つ確認なのですけど」

作「ん、なんだよ」

こ「あなた、前話の後書きで私に殺されたのでは？
なんで生き返ってるんです」

作「後書きで、自分の作品のキャラクターに殺された作者が、次の話であっさり生き返るのは日本小説界の伝統芸だろ」

こ「そうですか、それを聞いて安心しました」

作「ム、また襲う気か……あれ、でも何も持っていないじゃん」

こ「ええ、私は何もしませんよ……私はね」

作「？　なんのこと……ガッ！」

????「フフフ　コイツね、コイツのせいで………」

こ「よろしければお手伝いいたしましょうか？な○か様」

????「ありがとう　こなゆきちゃん。でもいいの　コイツとは前話の件も含めて

よくOHANASHI　したいから」

こ「わかりました　それでは。

…ああ、連れていかれましたね。

多少は真人間になってくれればいいのですが」

こ「それでは皆さま　次回またお会い出来る事を楽しみにしております

ごきげんよう」

作
「
I
,
l
l
b
e
b
a
c
k
:
:
:
:
:
:
:
」

ご奉仕 そのなな 汚名は返上、名誉は挽回……なのですよ（前書き）

ちよつとだけ長い話になりました。

ご奉仕 そのなな 汚名は返上、名誉は挽回……なのですよ

ざあああああああ

「なえか様 制服と下着の換えをお持ちしました」

「ありがとう こなゆきちゃん
そこに置いてー」

皆さま こんにちは 富士原家のメイド
こなゆきです。

マンネリですか、そうですか。

挨拶は人間社会の潤滑油ですよ。

それに、マンネリも貫き通せば
定番と呼ばれるではないですか。

「あああああああ
もーooooooooっ！」

びくっ

「朝から何してくれてんのよ
あのセクハラマスクはー！」

「な、なえか様 大丈夫ですか」

まだ、お伝えしておりませんでしたね。

私は今、富士原家の脱衣場におります。

なえか様がシャワーを浴びておられるので
こちらに控えていたのですが、ハア。

あ、コガラシさんですか？

流石にこれ以上なえか様と接触させるのは、
あまりにも申し訳ないので、此方には来ないようにフブキ姉様に監
視をお願いしておきました。

尚、なえか様ですが、フブキ姉様から詳しい状況を聞きました。

私が水を止めた後、ベッドから転がり落ちて床で頭を打ち気絶され
たそうです。

深刻な状態ではなかったそうで、すぐに目を覚まされました。

そのあと、すぐに謝罪に向かったのですが…

なえか様は全く私を責められる事無く、逆にお礼まで言われてしま
いました。

どうも怒りが全てコガラシさんに向いていらっしまったようで。

フブキ姉様にも特に叱責は受けなかったのですが、こういう時は逆
に怒られない方が辛いのですよ…

「こなゆきちゃん、そろそろわたし出るわ」

「あ、はい。かしこまりました」

さて、では朝食の用意を…

あ、朝食といえは一悶着ありましたね。

フム、早速名誉挽回のチャンスですね。

では。

……

……

……

「朝食は健康の基本！ガツガツ頂くがいい！」

「いただきます」

幸助が朝食を召し上がってらっしゃいます。

では、今の内に…

「なえか様」

ダイニングにつながる廊下でなえか様を呼び止めます。

「あれ、こなゆきちゃん どうしたの」

「なえか様 朝食は召し上がらないのですか」

答えは判ってますけどね。

「あー 私今日はパス。ごめんね、用意してくれたのに」

「まだ ご気分が優れませんか？」

「ああ…その、」

「ダイエットですか」

ははは…

なえか様 苦笑いされても逃がしませんよ。

「いけませんよ。朝はキッチンと召し上がりませんと」

「う…で、でもさ」

ニツコリ。

「ひ…」

なえか様、そこまで怯えなくてもいいじゃないですか。

「朝食を食べない事はダイエットに逆効果だということは常識ですよ」

「え！ そうなの！」

結構有名だと思いますけどね。

「それに、なえか様は剣道部所属でいらっしやいます。空腹のまま一日は過ごせないでしょう」

「そりゃまあ…部活終わりに軽く食べたりもするけど」

軽くですか？ まあ、そこは突っ込みませんが。

「完全に逆効果ですよ、それ。朝食を食べないとそのぶん体が栄養を取ろうと、しっかり吸収するんですよ」

「うぐっ」

「それに、なえか様はまだ成長期でいらっしやいます。多少の体重の増加は当然ですよ」

「当然って！ こなゆきちゃんだってわかるでしょ。500グラム増えるだけでも許せないのに！」

肉が！　なんでそんなところに！　スカートが！　ホックが！」

いやまあ、分かりますけどね。

「落ち着いて下さい。なえか様」

「う…う…肉が…嫌い」

だじゃれはスルーするとして

「なえか様、私も同じ女としてお気持ちはよく分かります。ですからカロリーを計算した料理を準備いたします」

「ごなゆぎちゃん…」

取りあえず鼻はかみましようか。

「ご安心ください。なえか様の為に私たちは派遣されたのです。なえか様の不利益になるような事は決して致しません」

「ごなゆぎちゃん！」

もうそんなに勢いよく抱きつかなくても。

ああヨシヨシ。頭を撫でてあげましようね。

…ふっ 計算通り（にやり）

「ムウ、このメイドガイ 個人の趣味嗜好には立ち入らん主義だが、場所と時間は弁えるべきだぞ。

ご主人。ちびっ娘メイド」

どわ！ こ、コガラシさんですか。

ああ、なえか様を呼びにきたんですね。

「誤解は後で解くとして、なえか様、では食卓に参りましようか」

「うん。なんか泣いたらお腹空いちゃったよ」

はっはっはっ。健康な証拠ですね。

「ウム。朝はしっかり食べるがいい。ご主人も正に成長期。この三日で体重が1・8キロも増えてるようだしな」

「は！」

い、言いやがったのですよ！

こ、これを避けたかったのに！

「な、なえか様！ 気になさらず！」

「ま、待って！ どこからそんな具体的な数字が？」

ああ、聞いちゃいました。

「フン！ このメイドガイを嘗めるなよ ご主人！
この俺の眼力をもってすれば服など無意味！
貴様は全裸も同然よ！」

「ぜ、全裸！」

はあ、私の努力が。

キューーーーーン

ピキピキピキーピキキー

ピキピキピー

おお！ 仮面の奥の眼が妖しく光って、空間に網のような、糸のようなものが。

「や ちよ…ま、まさか？」

がぼっ

なえか様が両手で胸を隠して、って隠しきれてませんね。逆に手で押し潰された形で強調されているような。

「クッククク……みえるぞ ご主人！
ハハアン……ホッホオ」

「乳と尻に数パーセントのボリューム増を確認。順調に成長しているようで誠に結構」

「きゃああああっ
嫌あああああああッ！！」

て、見てる場合ではありません。
お助けせねば。

「コガラシさん やめてください！」

「こなゆきちゃん……」

なえか様の前に両手を広げ、コガラシさんと正対します。

「コガラシさんはもう少し女の子の気持ちというものを…って聞いてます？」

はて、コガラシさんはじっと私を見たまま黙っていますね。

「ちびっ娘メイド。貴様、食事はキッチンと摂っているか？
体に成長の痕跡が見られないぞ」

は…成長？

「ご奉仕を行うにも健康な体なくては務まるまい。
もう少し自分自身の成長にも気を使うがいい」

ああ、そうか。まだ眼力を使用中なのですね。

それでなえか様の前に私が両手広げて立ってる訳ですから、全部見られたわけですね。

ついでにいえば、恐らく以前からチェックされていたんでしょうね。

ハッハッハ。

さて、ではなえか様と一緒に。

「うわあああゝゝゝゝゝゝゝゝん
見られたあゝゝゝゝゝゝ!」

逃げましょう。

走りましょう。

手に手を取って。

地球の反対側まで。

私はなえか様の味方です。

ええ、決して離れませんとも。

私となえか様の物語はこれからも続いてゆくですよ。

グスン……全部見られた。

ご奉仕 そのなな 汚名は返上、名誉は挽回……なのですよ（後書き）

作者（以下作） 「（後ろを気にしつつ）今回もお読みいただきありがとうございます」

こなゆき（以下こ） 「……………」

作「前話から9日ぶりの更新 間が開いた事お詫びします」

こ「……………」

作「今後も更新ペースはこの程度になると思いますが、いい加減に放り出す事だけはいたしません」

こ「……………」

作「未熟者なりに最低限のモラルは持っています。最悪終わらせる場合には、キチンと完結タグを打ちます」

こ「……………」

作「時間はかかってても、これから……って黙ってないでお前もアイサツしろよ」

こ「作者……」

作「ん？」

こ「死んじゃえ♪」

作「どわああああああ

何すんじゃない！」

こ「ほう？ 身に覚えがないとでも？」

作「え？ 今回のオチか？」

こ「他に何がありますか！

お、乙女の肌を何だとおもってますか！」

作「うーん、それな」

こ「読者様への挨拶が終わるまで待つてあげたのですよ。さあ、頭を出しなさい」

作「うーん」

こ「？ 何だかいつもと様子が違いますね？ 何かあるんですか」

作「いや、実は今回の話結構悩んだんだよ」

こ「といますと？」

作「まずコガラシにセクハラを止めさせるのは無理だろ」

こ「ええ、無理でしょうね」

作「で、問題はそのセクハラがお前に及ぶかどうかって事なんだよ」

こ「はい？」

作「当初の予定ではお前は唯一セクハラを受けないキャラになるはずだったんだよ」

こ「なんですと！」

作「腹黒キャラというか、上手いこと頭使ってピンチを切り抜けるみたいな」

こ「いや、真逆じゃないですか！

私、FAOEのあかいあくまばりのうっかりを披露してますよ！」

作「そうなんだよ」

こ「て、前話の後書きでも言いましたけど、この話書いてるの貴方ですよね。

何を他人事のように！」

作「小説を書く事の難しさと面白さを教えてもらったよ」

こ「何を爽やかにイ〜〜！」

作「というわけでこれから頑張ってくれ俺も未熟な書き手だけど頑張るから」

こ「何をマトメに入ってますか！

って終わり？ 本当に終わり？

え、だってまだ〇してないのに…」

こ「え、私が続けて喋ってる！

あ、あ、あのみなさま

こ、これからもよろしくお願い致します」

こ「え、本当に終わり？」

ご奉仕 そのはち 家族の絆……なのですよ（前書き）

作者はフブキよりも母親の方が好みます。

ご奉仕 そのほち 家族の絆……なのですよ

うう…帰り辛いです。

あ、失礼しました。

みなさま改めましておはようございます。

富士原家に仕えております メイドのこなゆきです。

なえか様は学園に向かわれまして、私はお見送りした後、富士原家に戻る途中です。

ええ、戻らなくてはならないですよ、はあ。

うう、コガラシさんと関わる以上こういう事態も想定はしていたのですが。

いぎ、我が身に降り掛かると…

は！ いけません。私は富士原家に仕えるメイド。この程度で挫折してはこの先やっていけません。

心を強く！ 強く持つのですよ、こなゆき！

裸を見られた程度で、裸、はだか…

うう駄目です。

こんなに自分が打たれ弱いとは。

はあ、どうしたものでしょう。

「こなゆき」

あ、フブキ姉様。

気がつけば富士原家の前までたどり着いていたんですね。

「貴女、大丈夫ですか」

「え、ええ。もうへっちゃらですよ」

うーむ、我ながら古いですね。

「こなゆき…お願いですから無理はしないで」

「姉様、本当に私は大丈夫ですよ」

ニコリ

なえか様も泣いて喜ぶ(?) 私の笑顔、ここで披露ですよ。

「こなゆき」

ぎゅっ

ほわ!

ね、姉様！

ど、どうしたのです。

急に抱きしめるなんて。

ぎゅう

く、苦しいのです。

顔が、ちょうど姉様の胸に。

い、息が。

「こなゆき、あなたがしっかりしているのは私が一番よく判っています」

いや、姉様、取り敢えずはなして下さい。

「貴女は幼い頃から、本当に手の懸からない子供で、メイド修行を始めてからもどんどんと成長していった」

ムガ、ムガ、うわ、姉様の胸柔らかくてどんどんと埋まっていきます。

「そんな貴女は私の自慢の妹です」

姉様の胸も充分自慢していいと思います。

「けど、」

ぎゅ、ぎゅ

ぐわあ、力をいれないでえー

「貴女は私に、いえ誰にも弱みを見せようとしない」

今、私は弱っている最中です。

「私も反省しているのです。メイドとしての自分を貫くあまり、妹である貴女を蔑ろにし過ぎていたのではないかと」

いや、先輩メイドとしての姉様は私の目標ですよ。

「今朝の一件で気付きました。家族を大事にできないメイドに真のご奉仕など出来る筈がないと」

メイドにとってはご主人様が第一であり、家族を後回しにするのも仕方ないと思うのですが。

そもそも、うちの家はお祖母様も母様も所謂家族としての愛情は注いでいなかったような。

お祖母様は先輩メイドとして、教育して下さいましたし、母様は、まあ…

そう考えると、姉様は自分が家族としての愛情を注がれなかった分、私に愛情を注ぐ事で代償行為にしているのかも知れませんか。皮肉な見方ですが。

「ですから、こなゆき！ 貴女は私が守ります。守って見せます。だから、これからは私を頼って下さい。私だけには弱いところを見せてください」

って、考え事してる間に、さらに姉様の腕に力が！

姉様！

本当に危ないのです。

放して、放してください。

「こなゆき、私は決して貴女を離しません」

Help! ヘルプ ミー!!!

「この世でたった二人の姉妹、共に生きてゆきましょう」

私は違う意味で逝きそうです。

あ、

本当に、

もう、

駄目、

なので。

「こなゆき、貴女もそう思う…って、こなゆき！　こなゆき！　し、しっかりして」

この後、姉様の介抱によりなんとか息を吹き返しました。

あ、付け加えておくとコガラシさんは原作の三倍ほど無惨な肉塊に変えられました。

それを見て、多少ショックが和らいだのは…

誰にも言えない乙女の秘密、なのですよ。

ご奉仕 そのほち 家族の絆……なのですよ（後書き）

こなゆき（以下こ） 「みなさま 今回も駄目作者の駄作をお読みいただきありがとうございます」

こ「本来であれば作者もここで挨拶するべきなのですが、リアルで少々問題があり、こちらには来れないとの事で私が独りで挨拶させていただきます」

こ「なお、作者より伝言を預かっており、今回の話が当初の予定より短い話になった事をお詫びしたい、との事です」

こ「どうも本来はこの後、なえか様が戻られてからの話を書く予定だったようです」

なえか（以下な） 「ちょっとどうなってるの」

こ「あ、なえか様来られたんですか」

な「何で私の出番を書かないのよ
私は主人公でしょ」

こ「あー この話に於ける主人公は私ですし
原作の主人公はコガラシさんでは？」

な「何を言うのよ、その二人が仕えるご主人様である私こそが主人公でしょ」

こ「はあ まあ それはそれで構いませんが

なえか様 何しにいらしたんです？」

な「もっと私の出番を増やすように作者に言いに来たのよ」

こ「あー 残念ですね。今回 作者は不在なのですよ」

な「それよ！ あいつ一体何やってんのよ」

こ「リアルの事情と聞いてますが…」

な「なにがリアルよ！ だいたいあいつ別の連載作品は毎日更新してるじゃないそんな余裕があるならこっちも、もっと頻繁に更新しなさいよ」

こ「まあ、それは確かに」

な「絶対に許せないわよ」

こ「ただ次回更新もぶっちゃけ一週間後になるですよ」

な「なによ、それ！

絶対に…：しい…：よ」

こ「なえか様？」

な「あれ、な…：か声がと…：れてるよう…：」

こ「な、なえか様！ 声だけじゃなく御姿まで」

な「な！ きつ… 作…のやつ…」

こ「な、なえか様！」

な「おね…い こな…きちや… 私のか…き…」

こ「なえか様！ なえか様——」

な「さよ…ら」

こ「な、」

な「……………」

こ「なえか様…」

こ「……………」

こ「……………」

こ「作者…」

こ「ここまでですか」

こ「自分の意志に反して動くキャラクターは消してしまいますか」

こ「駄目作者だとは思っていましたが、ここまでとは」

こ「いいでしょう、駄目作者」

こ「これからは手加減しません」

こ「貴方は私の敵です」

こ「次回この後書き界に来る時は覚悟なさい」

こ「その時が貴方の命日です」

こ「よし、では今のうちに武器を調達しておきましょう」

こ「では一旦この後書き界を離れるとしましょう」

こ「でゅわ!」

作者「本文より後書きが書きやすい……駄目だ、早く何とかしないと」

ご奉仕 そのきゅう メイド足るもの…なのですよ(前書き)

地味に原作ブレイクしてみました。

ご奉仕　そのきゆう　メイド足るもの…なのですよ

皆さま、こんにちは。

何とか生還して参りました富士原家のメイド
こなゆきです。

只今、

「だから、あなたの全てが問題あるって言ってるのよ！」

「むう、落ち着けご主人。このメイドガイに任せれば貴様の未来は
薔薇色だ」

「あなたに任せてたら、私の現在いまがボロボロにされたのよ」

「あの、姉ちゃん、落ち着いて」

「なえか様、落ち着いてください」

「やれやれ、落ち着きのないご主人だ」

「誰のせーよーー!!」

………家族会議の最中なのですが、場が大変荒れております。

まあ、こうなるとは思っていました。

部屋の隅に控えつつ、事の成り行きを最初から思い返します。

始まりはいつも雨。

そう、この富士原家に血の雨が降ったあの時から振り返りましょう。

.....

.....

.....

「さ、それではこなゆき帰りましょう」

「はい、姉様」

あの後、なんとか蘇生した私は（極楽と地獄を一度に味会わせていただきましたよ）姉様と一緒に富士原家の門を潜りました。

その際、私の身体が強張ったのを姉様も気付いたんでしょうね。

「大丈夫ですよ。こなゆき」

姉様が私の両肩に手を載せ、声を掛けてくれます。

「あの不埒者には充分制裁を加えておきましたからね」

制裁、まあ自業自得でしょうね。

どうせ、すぐ復活するでしょうし…

「ああ、こなゆき。そっちに行ってはいけませんよ。スカートの裾や靴が汚れますからね」

姉様の言葉に中庭を見ますと、

うわ！！

え、エゲつないですね。

想像はしてましたが、これは。

身体中で赤くない場所は見当たりませんね。

ああ、左手の肘から先が曲がってはいけな方向に。

指が五本とも念入りに捻られていますね。

右手の方は…

あれ肩から取れ欠けてません？

下半身は服のせいでよく見えませんが、見た事もない武器が刺さったままになっていますね。

うゝむ、某運命の赤い弓兵が立つ剣の丘を想起させる光景ですね。

で、問題は頭部なんですけど。

取り敢えず耳から出てるあの汁は血じゃないですよ。

まさか、のうみ…

いや、怖い想像は止めておきましょう。

よく見ると身体から何かが抜け出ているような。

「もう大丈夫ですよ、こなゆき。

あなたは私が守ります」

姉様、言葉は嬉しいんですが眼が恐いです。

まあ頼りにはしますけど。

ブロオオン

キキッ

家の前に車がドリフトしながら横付けしてきます。

ああ、御前様が到着されたんですね。

「コガラシーー！！

コガラシはおるかぁー！！！」

うむ、御前様もお怒りですね。

幸助様から今朝の一件を聞いたんでしょね。

まあかなり誇張、というか誤解されるような言い方したんでしょね。

原作では確か：

女の子の大事なモノを奪われた、でしただけ。

めちやくちやに汚された、とも付け加えてたかな。

「あら、御前様。コガラシさんでしたらそちらに」

「コガラ：」

姉様が中庭の方へ視線を向けます。

それに併せて御前様もそちらに顔を向けましたが：

ああ、絶句してますね。

後ろにいるなえか様や幸助様も。

：無理ありませんけどね。

流石にここまで酷いと叫び声も出ないでしょうね。

「御前様。お話しでしたらどうぞ、家の中で」

姉様が何時ものように軽く微笑みを浮かべながら御前様に話し掛けます。

「ふ、フブキ。これは、その：」

「言って判らない人にはお仕置きです」

そう言ってニコヤカに笑うフブキ姉様は完璧なメイド振りです。
御前様たちもそう思われたのでしょうか。

カクカクと頷きながら黙って家の中へ入ってゆかれました。

「こなゆき、戻りますよ」

「はい、姉様」

コガラシさんを放っておいて家の中へ戻ります。

同情なんてしません。

乙女の怒りは恐ろしいのですよ。

その後、コガラシさんが復活するのに
二時間程待ちました。

流石に今回は時間懸かったみたいです。

ちなみにその間、なえか様と幸助様は
フブキ姉様に敬語で話しておられました。

冒頭の家族会議が始まるのは、
コガラシさんの復活に幸助様が
泣いて喜び、なえか様が

私達三人に化け物を見るような目を
向けられてから後の事となります。

…私には二人みたいな真似は
到底出来ないんですよ、なえか様。

………

………

………

「一体ご主人は何が不満があると言うのだ」

「あなたの全てによ！」

会議とは名ばかりのなえか様の一方的な詰問

(というより只の絶叫ですね)

は続きますがコガラシさんには
全く届いてませんね。

そろそろ私も発言しますか。

「なえか様、よろしいですか」

「こなゆきちゃん」

流石に叫び疲れたのでしょう。

肩で息するなえか様に声を掛けます。

「私も少々コガラシさんとお話しさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「そうね、こなゆきちゃんに任せるわ」

流石に叫び疲れたわ。

そう言ってなえか様は紅茶を口に含まれます。

さて、

コガラシさんに向き直り、詰問を始めます。

「コガラシさん、貴方の女性に対する態度には問題があります」

「ほう、お前も問題というか」

皆さまも黙って私達の会話を聞かれます。

「私達女性にとって、裸を覗かれたり、朝寝しているときに寝所に忍び込まれる事は耐え難い苦痛です」

「ぬうつ」

こんな当たり前の事を改めて言うのも

どうかと思いますけど、言わなきゃ
伝わらないでしょうし、ね。

「まして、なえか様は
まだ17歳のうら若き女性。
見ず知らずの男性が同じ家にいるだけでも
ストレスなのですよ」

なえか様が力強く頷かれています。

ここで、御前様が

「しかし、コガラシは必要なのだ。
その：問題は多いと思うが」

家督継承の件は未だ言えませんかからね。

齒切れも悪くなります。

「ええ、御前様の決定です。
それはなえか様にもご承知頂きたく」

ええ

なえか様が激しく嫌そうな顔をされます。

「なえか、そのワシは心配なんじゃ。
確かにコガラシは問題の多いやつじゃが
頼りになる事は間違いない。
頼む、受け入れてやってくれんか」

「う…」

御前様に頼まれるとなえか様も弱いみたいです。

基本的に優しい方ですからね。

「なえか様、私からもお願いいたします」

今度はフブキ姉様の援護射撃ですね。

「確かにコガラシは女性に対する配慮を知らない困った男ですが、（ギラッ）頼りになるのは確かです」

姉様、目を光らせるのは…

皆さま怯えていますよ。

「ご安心ください。私もおります。何かあれば、その時は…ふふ」

姉様、その笑い方は怖いです。

幸助様。床の上に正座しなくてもいいと思いますよ。

「ね、姉さん。お爺ちゃんやフブキさんもこう言ってるんだし、置いてあげてもいいんじゃないかな。ね、ね」

ですから、まずは正座を止められては。

「わ、分かったわよ。」

そこまで言われてゴネてたら女が廃るわ。

良いわよ、コガラシさんがこの家に

住むことを認めてあげるわよ」

部屋にホッとした空気が流れます。

幸助様もようやくソファアに戻られました。

「やれやれ漸く話は終わりか」

待ちなさい。

アナタへの話は終わってません。

「コガラシさん。アナタがこの家に住むことは認められましたが、アナタの行動まで認められた訳ではありませんよ」

「ぬう。しかし俺は主に仕えるメイドガイ。

従者としては主の全てを把握せねば、

より良いご奉仕は出来ん」

さすがに食い下がりますね。

「そもそも主たるもの従者に裸を見られた程度の事で騒ぐこともあるまい。我らは主の影。人に在って人に在らず。そんな些細な事を気にするようでは良き主人には成れんぞ」

なるほど。

「コガラシさんのご奉仕哲学はともかく、
なえか様はご主人である前に一人の女性です。アナタの理想を押し
付けないでください」

「ぬぐっ」

そう、これは原作を読んでいた時から感じていた事。

コガラシさんは自分が仕えるべき主を求めている。

それはメイドガイという他人に仕える事を生業にしている者からすれば本能にも似たものなのでしょう。

自分自身の全身全霊を掛けて仕える事が出切る主。

そんな主と共に日々を過ごす。

私もメイドの端くれ。

その気持ちも分かりますし、
悪い事だとは思いません。

ですが、

「コガラシさん。私はアナタを尊敬
しています。姉様と同じほど」

皆さまが私の話を黙って聞かれます。

「メイドの先達としてアナタを見習って参りました」

ですが、

「今のアナタは最低です」

そう言わせていただきます。

「メイドたるもの、仕える主の為にその持てる力の全てを奮え。そう教わってきました」

コガラシさんも黙ったままです。

「分かりますか、コガラシさん。

” 主の為に”

力を奮うものをメイドと呼ぶのです」

アナタのそれは只の自己満足です。

私の声が冷たく部屋に響きます。

誰も口を開きません。

言い過ぎた、とは思いません。

彼のやり方が強引とはいえ、正しい時もある事は認めますが、それでもです。

「ちびっ娘メイド、いや、こなゆき」

コガラシさんが下を向いたまま私に質問してきます。

何気に名前で呼ばれたのは初めてです。

「俺は間違っていたのか？」

「それは私が決める事ではありません」

皆の視線がなえか様に向きます。

コガラシさんの目を（マスク越しですけど）正面から見ながらなえか様が告げます。

「コガラシさん。アナタが一生懸命だという事は分かった。こなゆきちゃんが言うくらいなんだから優秀な人なんだと思う」

けど、

「私は普通の女の子なの。お爺様みたいに周りに仕える人達がいる事が当たり前じゃないの。アナタにとっては当たり前でも私にはそうじゃないの。そこを分かって」

「……………」

なえか様の言葉にコガラシさんも考え込んでいます。

やがて、

「俺が間違っていた」

コガラシさんがポツリと溢します。

「ご主人はまだ何も知らぬ少女だったのだな」

なえか様が私に笑顔を向けてくださいました。

ええ、なえか様。

我々の犠牲は無駄では無かったのですよ。

「俺は慌て過ぎていた」

うんうん、そうですね。

「ご主人にはまず主としての教育が必要だったのだな」
は？

「従者に裸を見られた程度では動じぬ
立派な主に育て上げねば」

はい？

「クックック。任せろ、ご主人。
この俺にかかれれば貴様を裸で街を歩いても
動じぬ程の人物に育ててやろう」

は、裸？ 街？

「こ、こなゆきちゃん…」

え、え〜と私もしかして、

「クックック、感謝するぞ、こなゆき。

お前のお陰でより良いご奉仕が
出来そうだ」

余計な事、しました、か。

コガラシさんに火を付けちゃった、のかな。

クックック、ご主人、任せろ。

貴様の未来は薔薇色だ！

は、放して幸助！

あのセクハラ魔神を今の内に！

ね、姉さん！ 包丁は駄目だよ！

フブキ、頼むぞ。本当に頼むぞ：

お任せください、御前様。

イザというときは、ふふ：

……何でこうなったんでしょう。

と、とにかく私達の物語はまだ続きます。

今後とも宜しくお願い致します。

……フブキ姉様の今後が心配です。

ご奉仕 そのきゅう メイド足るもの…なのですよ（後書き）

作者（以下作） 「二週間振りのお待っとさんです。何とか書き上げました」

こなゆき（以下こ） 「古い挨拶を…

まず読者の方に謝罪するのが先ではないのですか？」

作 「先週末に活動報告で謝罪したので、二度はクドイかと思って」

こ 「アナタの活動報告なんて誰も読んでませんよ。調子に乗らないように」

作 「キツイなあ。今回は酷い目に会ってないだろ」

こ 「だからと言って、更新が二週間振りだった事実は変わりませんよ。

もっと長い話をこまめに更新されてる方は沢山いらっしゃいますよ」

作 「うむ、ぶっちゃけ他の作品が忙しくて」

こ 「全く、初心者のお癖に無理し過ぎですよ」

作 「それに関しては反論出来んが、始めた以上は責任とらんなあ」

こ 「で、今回は良いとして、次回の更新は何時になるんです？」

作 「うむ、わからん」

こ「この無責任作者あゝゝ！
舌の根も乾かん内にそれかあゝゝ！」

作「出来もせん事を約束する方が無責任だろ？」

こ「くっ　でしたら連載を一本に絞ったらどうです？そしたら無理なく書けるでしょ」

作「そうなった場合、この作品を切る事になると思うんだが…
それは、最後の手段だな。なるべく、そうはしたくない」

こ「意地っ張りですねえ」

作「何しろ『メイドガイ』のSSって滅多に無いからなあ。タイト
ルにまで背負ってるし、何とか書かんと」

こ「書かんと、は良いんですけど今後はどうすんです？　今回プチ
原作ブレイクしましたけど」

作「うゝむ、実は他作品のキャラをメイド、或いはメイドガイとし
て召喚するというネタも考えてはいるのだが」

こ「何時、書くかはわからないと」

作「本編に絡めるか、番外編にするかも決めてない。というかまだ、
コガラシも暴れてもらってないしな」

こ「そう言えば、そうですね」

作「だから未だ新キャラ出すのは早いかなあと。ぶっちゃけまだこ

の作品自体 掴みきれてないんだよなあ」

こ「頼りないですねえ。あ、そう言えば今回の姉様の扱いなんですけど、なぜヤン○レに？」

作「コガラシが普通に倒れててもツマンナイんでな、ちょっと過激にしたらああなった」

こ「また、いつもの思い付きですか？

姉様、怒ってましたよ」

作「ん、それはイカンな。襲われる前に逃げださ…ね……ば」

こ「ふっふっふ。甘いですねえ。逃げられると思ったんですか」

作「な…何を……した…」

こ「大丈夫ですよ。ちょっと体が痺れるだけです。後遺症もありますせん」

作「……………」

こ「フム、もう喋れませんか。ですが意識はあるでしょう。目も見えてるはずですよ」

作「……………」

こ「もう連れていっても結構ですよ」

???「ありがとう、こなゆき。」

これでゆっくりお話し出来るわ、ふふ」

こ「ええ、どうぞごゆっくり。

……さて、次回の更新はどうなる事やら」

こ「それでは皆さま、次回お目にかかれる日を楽しみに待っております。

ごきげんよう」

作「……………」

（頑張って連載続けます）」

ご奉仕 そのじゅう どんなときもあなたのお側に…なのですよ (前書き)

イカン。後書きに力入れすぎて前書きに書くことが思い浮かばん。

ご奉仕　そのじゅう　どんなときもあなたのお側に…なのですよ

皆さま、初めての方には初めまして。
そうでない方はお久しぶりです。

富士原家のメイド、こなゆきです。

現在時刻は夜の11時。

場所はなえか様のお部屋。

部屋には私となえか様の二人だけです。

ドキドキドキ

うゝむ、なんだか緊張してきました。

「じゃ、じゃあ、どうぞ」

目の前ではなえか様が真っ赤な顔で、
私の発言を促します。

ふうー

一つ息を吐いて、なえか様に告白します。

「あの、貴女の事が大好きです。
付き合ってください」

言った。

言っちゃいました。

なんで、私がこんな事を言ってるのか。

それをお話するには、今朝まで
時間を遡らなくては行けません。

場所はなえか様たちが通われる
私立秀峰制覇学園剣道部道場。

.....

.....

.....

（前回と展開一緒とかツツコマないように）

.....

「勝負は三本 待った無し！」

現在道場内ではなえか様が所属する女子剣道部の皆さまと男子剣道
部の皆さまが向かい合っておられます。

何でも最近剣道場を新築されたそうなんです。で、なえか様達女子
剣道部が勝った場合にはその道場の専有権をいただけると。

で、男子剣道部の皆さまが勝った暁には、

「富士原なえか！お前のその乳イ思う存分揉みしだかせて頂きたい
イーッ」

主将さん：

言った後にちよつと照れないでください。

もちろん直になーッ

剣道着は半脱ぎ希望ーッ

うおおおおおーッ

他の部員の方も盛り上がらないように。

普通にセクハラ通り越してただの犯罪です。

いくら高校生だからといって許されないものは許されませんよ。

あ、なえか様 真剣抜かれました。

というか普通に持ってるんですね、真剣。

さすが私立ですね、自由な校風です。

いや、違うでしょ 私。

まあ、慣れてるんでしょうね、お互いに。

心なしか男子剣道部の皆さまも謝り慣れてるような。

最初から言わなきゃいいでしょうに。

大体仮に勝ったとしても本当に触れますかね。

涙目で睨んでくる同級生の女子相手に、抵抗なく触れますかね。

某怪異小説の主人公の男子高校生は友達の胸揉むなんて無理ってチキン呼ばわりされてましたけどね。

「天誅――!!」

ギャーーーー

ああ、男子の皆さま斬られましたか。
ま、流石に峰打ちですけどね。

「…今日もご主人は無駄に元気で何より結構。
だな、こなゆき」

「ええ…そうですね。コガラシさん」

今の私の状況を簡単に説明致します。

剣道場を見下ろす一際高い木の枝に乗り、コガラシさんに掴まりながらなえか様を見守っております。

わかりませんか、そうですか。

ではもう少し詳しく御説明致します。

まず、本来であればハウスメイドであるはずの私が何故、コガラシさんと一緒になえか様の通われる学園にいるのか、ですが。

コガラシさんに連れて来られたんです。
勿論フブキ姉様の許可は取ってますが。

どうもコガラシさん、前回の事で私の事を気に入られたようなので

すよ。ご主人を教育するのに前も力を貸せ、それと、俺が正しいメイドガイ道を進んでいるか、傍にいて見ていてくれと言われてしまいました。

いや、メイドガイ道って：

私はあくまでメイドであって、メイドガイではないのですが。

正直フブキ姉様が反対されるのではと思ったんですが、簡単にO

K. 出されたんですよね。

姉様とコガラシさんの関係もよく分からないんですよねえ。

まあ、いくら姉妹とはいえあまり踏み込むべきではない領域もありますよね。

一歩間違えればただの”野暮”になりますし。

取り敢えずコガラシさんは私の裸を許可なく見ないという事には同意していただきました。

（なえか様には裏切り者と呼ばれましたが）

まあ、当面の危機は去ったのですが、一難去ってまた一難。

コガラシさんはご主人に付き従う時には、なるべく己の存在を感じさせるべきではない、とお考えだそうです

（因みにこの考え方は私も同意です。メイドとか執事とか主人の傍にいつも侍っているような存在はなるべく主人に己の存在を感じさせないというのは大事な事なのです）

学園でなえか様を見守る際にも、このように高い木に登りなえか様どころか誰にも気付かれないような場所を陣取っているのです。

それはまあいいんですけど、私も当然のように木の上まで連れて来

られたんですよね。

別に高所恐怖症ではないんですけど、細い木の枝の上で掴まるところもないものですから、さっきからコガラシさんの袴を掴んでいるわけです。

え？

袴じゃなくってスカートじゃないのかって？

：いや、袴にしときましょうよ。

いくら”メイド”ガイだからって、ねえ。

そうして”袴”に掴まりながら目の前のモニターを見ていた訳なのですよ。

あ、まだモニターの説明をしていませんでしたね。

今、私の目の前にはコガラシさんの持つスキル「メイドガイ・モニタリング」によって空中に造り出されたモニターを通して、なえか様達の様子を見守っていたのですよ。

まあ、そうでもないかと剣道場の中の様子なんてわかりませんからね。コガラシさんならともかく。

このモニター、画質、音質共に素晴らしくなえか様の様子がとてもよく分かります。

勿論、これは私の為にやってくれています。わざわざ連れてきた以上、気は遣ってくれてるみたいですね。

ただこのモニター、コガラシさんの眼から出てる光で構成されてる訳ですけど、御本人は見えるんですかね、この映像。

コガラシさんでしたら何でもアリですけどね。五感が封じられた程

度じゃ困らない、でしたっけ。まさに商業出版界のチートキャラですね。

「む！」

「？　どうかされましたか、コガラシさん」

コガラシさんの頭髮の一部がピンと立って、何か電波を受信しています。

いや、何の鬼○郎ですか。全くの余談ですけど、あの作品って幅広いですよ。一番最初のアニメ化時なんて、白黒アニメですからね。中の人も、孫○空やら、アン○ンマンやらですからねえ。確かアニメは第四か五弾まで作られたんですよ。

実写映画は撮られるは、原作者の半生がN○Kの朝ドラですもんねえ。大したもんですよ。

「我ら以外にご主人を見ている者がいる。かなり強い意志を感じるぞ」

私が下らない思考に耽っている間にも、（そこ！　不真面目なやつとか言わない。私にこの状況で何をしろと）コガラシさんは警戒を強めているようです。

更に余談ですけど、そのピンと立つ頭髮ですけどメイドガイ・センサーというそうです。

基本的になえか様に向けられる強い意志（悪意とは限らないそうです）を感じる為のものだそうで、フルに性能を発揮すれば周囲半径20kmのエリアをカバー出来るとか。

まあ、20kmも先から強い意志を向けてどうすんだと思いますけ

どね。

「これは視線だな。俺以外にもご主人にこんな熱い視線を向けるとは、何者かは知らんが油断できんな」

おー 気合い入ってますね。

パチパチパチ（心の中で。手は相変わらず袴掴んでいますからね）
さー 今回はどうなりますことやら。

うむ。我ながら気合い抜きすぎですね。

といっても原作知識ある身としては、正直気合いが入らないんですよねえ。

今回はそれほど大事には成らなかったと思いますし、それに原作介入というの中々難しいものだと思い知ったのですよ。
前回やら前々回の件で。

所詮私は戦闘スキルも持たないハウスメイドですからねえ。おまけに何だかうっかりスキル持ちという嫌な自己発見もしてしまいたし。自ら運命を変えようというわけでなく、運命に流される訳でもなく、運命に流していただく、そんなスタンスで行こうかと思っているのですよ、最近は。

我ながら若さもなく可愛げもない考え方だとは思いますがね。

「ふむ、ご主人は朝の鍛練を終えたようだな」

まあ、あれは部活というよりは鍛練でしょうね。剣士は人を斬って一人前とも謂いますし。

「では、我らも移動するのでしょうか」

「そうですね。ではなえか様の教室が見える位置に」

え？ 移動ですか。

コガラシさんの肩の上に載って髪なんて掴ませてもらってますけど。痛くないのか、と訊ねたらその程度の負荷では何の問題もないと言われました。さすがですね。

：何かが間違っているような気もしますが、あまりお気に為されませんようお願いいたします。

ちなみにコガラシさんの髪って結構サラサラで良い手触りでした。

ご奉仕 そのじゅう どんときもあなたのお側に…なのですよ (後書き)

作者(以下作) 「一週間ぶりのお久しブリーフ！」

こなゆき(以下こ) 「今週は無事更新できて、ほっと一安心ですね」

作「うむ！ 内容的には完全にプロログだけどな(ちゃんとツツコメよ)」

こ「そうですね。下手すりゃ鬼○郎の話しか覚えてませんよ、私(どうせ、ちゃんとツツコメ！とか考えてるんでしょ)」

作「さすがにそれは酷いだろう。主人公だぞ、お前(全くツツコミも出来ないのかよ、ダメメイドが)」

こ「そう言われても、文字数の割りに内容薄いですよ、今回(いちいちつまらない事に付き合わさないで欲しいですね。このダメ作者)」

作「うゝむ、それを言われると辛い(お前がしっかりしないから人気出ないんだよ、この作品)」

こ「あ、そう言えば冒頭で私がないか様に告白するシーンがありましたね(あなたがしっかり更新しないから人気出ないですよ、この作品)」

作「ああ、あれな。まあ、原作読んでる人には次回以降の展開バレバレだけどな(全く主役をフブキと交代させるぞ)」

こ「まあ、でしょうね（展開がベタ過ぎるんですよ、駄作者）」

作「しかし、世のSS作家さん達はスゴいよなあ。みんな面白い話書くもんなあ（本気で主役替えてやろうかな）」

こ「まあ、あまり他人を羨ましがっても仕方ありませんけどね。才能が無くても書き始めた以上は、辞める積もりもないのでしょうか（さっさと辞めなさい。この無能作者）」

作「うむ。毎回ここで愚痴言ってるが、読んでくれる方は確かにいるわけだからな。感謝の気持ちを持って書いていかないと（お前も俺に感謝しろよ）」

こ「そうですね。それにこのサイトでも『仮面のメイドガイ』のSが他にも書かれ始めたのでしょうか。先達として負けられませんか（貴方は周回遅れて感じですけどね）」

作「そうなんだよなあ。今回は本当にプロログ程度だしなあ。何とか次回も頑張って更新せねば（フブキ主役：いや、ネロ主役ってのもありかな）」

こ「ええ、今回は私もひどい目に会ってませんからね。気持ちよく応援できますよ。（他の方が書かれ出したって事はこの作品もう終わってもいいんじゃないですか）」

作「ありがとう。俺は書く！ 書くぞ！

（ネロ主役：悪くないかも）」

こ「ええ、その意気です。頑張ってください。（辞めるんなら早く辞めてしまいなさい。屑作者）」

作「いやー今回は気分よく後書き終われそうだ。たまには良いよな、こういうのも。（やっぱり転生、いや、憑依型にした方が…）」

こ「そうですね。たまには良いでしょう、こういうのも（まあ、ほっといても読者さんから見放されるでしょうけど）」

作「はっはっは（いっそ、ネロの家にフブキを仕えさせるとか…）」

こ「はっはっは（ようやく終わりですね。早く真の終わりが来ることを祈りましょう）」

作「じゃあな、こなゆき。また次回も宜しく頼むよ（イケる！これはイケるんじゃないか!）」

こ「ええ、こちらこそ宜しくお願いいたします（もうしばらくの我慢ですね）」

作「じゃあ締め挨拶は宜しく頼む。俺は早速次回の構想を練るよ（これでおれも人気SS作家仲間入りじゃあー!）」

こ「ええ、お任せください（早く私の視界から消えてください）」

こ「……（やっと消えましたか）」

こ「ええ、作者に成り代わり私が締めの挨拶をさせていただきます（逝けばいいのに）」

こ「次回更新は相変わらず未定ですが、作者もやる気になっているようですし、近々皆さまにお届け出来るかと思えます。未熟な作者

ではありますが、温かい目で見守っていただければ幸いです。

ではまた次回お会いしましょう。

ご機嫌よう。

（賢明な読者の方々なら近い内に見捨ててくださるでしょうね。こんな作者）」

ご奉仕 そのじゅういち 乙女心を理解できないものは…なのですよ (前書き)

無事更新できた事を二次創作の神様とメイド神に感謝いたします。

ご奉仕 そのじゅういち 乙女心を理解できないものは…なのですよ

皆さま おはようございます。

こんにちは。こんばんわ。

初めまして。お久し振ります。

またお会い出来ましたね。

その後元気で過ごされていましたか。

富士原家に仕えるメイドこなゆきです。

現在私の目の前では、

「いや、だからさあ、嬉しいことは嬉しいんだ。うん、手紙なんて貰ったのは初めてだし。

でもさ、こ、こういう時ってど、どうするのが正解なのかな。

服はまあ制服着るんしかないんだけど。でもさ、ちょっと髪にリボンつけるとかさ、何か出来る事はあるのかなって。

いや、別にそんなに気合い入ってるって訳じゃないの。そこは勘違いしないで、ね、ね。

でもやっぱり折角手紙をくれたわけだし、最低限の礼儀ってものがあると思うの、うん。

人としてというか、剣士としてというか、お、女の子としてというか…

や、やっぱり嫌でしょ。向こうはすごい気合い入れてくるかもしれないのに、来た相手があまりに汚い格好したら。手紙出した事を後悔するかもしれないし、こんなはずじゃなかったなんて思われたら嫌だし。

で、でもあまりにこっちが気合い入りすぎてたら向こうも引くと思わない？

うわ、コイツなんかがつついてんなあみたいなさあ。そんなに男に
餓えてたのかって。

わ、私だってそりゃ彼氏欲しいわよ。でも別にがつついてなんてい
ないもん。

第一私には剣があるし。友達だっているし。周りの友達もみんな彼
氏いないし。

で、でもチャンスは無駄にしたくないというか、ち、ちょっと勿体
ないかなって気もするし。

あ、会わないっていう選択肢はないの。あ、あくまで会うことは前
提で、会ってからどうしようって話で。

で、でも会うためにはやっぱり準備ってものが必要だと思うし…」

…なえか様が延々と喋りつづけておられます。

ここはなえか様の自室。

時刻は夜の十時をまわったころでしょうか。

部屋には私となえか様の二人だけ。

なえか様のお話が続いている為、一旦時間をなえか様が家に戻ら
れた時まで戻しましょう。

なえか様が放課後の部活動を終えられ、家に戻られ、真っ直ぐにお
部屋に向かわれたあの時まで。

………

………

.....

……（マンネリですって。これはパターンというのですよ。偉いひとにはそれが分からないのですよ）……………

「こなゆき？学園で何かあったの。なえか様が慌てて部屋に上がって行かれたのだけれど」

フブキ姉様が出迎えてくださいます。私達は基本的になえか様には静かな学園生活を送っていただく事を目指しております。

ですので、基本的に登下校時などになえか様と一緒に帰ったりする事はありません。あくまでも影として従います。なえか様が家に入られてからは、多少周りの警戒をしてから（コガラシさんは今も念入りにされているようです）家に入る事になります。

なえか様が家に入られてからはフブキ姉様に対応をお任せする事が多いのですが、そうですか。やはりそうなりますか。

「ええ、姉様。実はなえか様にラブレターが届いたのですよ」

「まあ、なえか様に。それで相手はどんな方なの」

うむ、姉様も目が輝いてますね。やはり乙女にとって恋バナというのは特別なものなのでしょう。

って考えてみればいいんですかね。なえか様はいずれは富士原財閥の後継者となられるお方。私達はその護衛も兼ねている筈なんです。

まあ、手紙もらったからいきなり結婚するわけでも無し、静かな生活を守るという意味では干渉しない方がいい、という事なのでしょうか。

「それで、こなゆき」

おっと姉様の質問に答えてませんでしたね。

「さすがに手紙の内容までは把握してないので、差出人の方の事は分からないですよ」

「あら、ならどうしてラブレターだと？」

当然の疑問ですね。

「なえか様の下駄箱に可愛い封筒に入った手紙が届けられていたですよ。」

それを見つけた時のなえか様の動転ぶりや、今のフブキ姉様の話から推察する限り、ラブレターで間違いないと思うのですよ」

まあ、実際は原作知識ってやつなのですが。

「なるほど。でもなんだか可愛いわね。下駄箱にラブレターなんて」

姉様が微笑まれます。姉様こそ可愛らしいのですよ。とてもコガラシさんをあんな目に会わせる方とは…げふんげふん。

さて、原作知識ってやつによりますと、そろそろ、

うきやああああああああ！！

ドーン！！

「な、何事でしょう」

慌てて二階に上がってゆく姉様の後を追います。

しかし、今回はどうしたのですかねえ。正直それほどの大事にはならないと思うんですが（なえか様的には一大事でしょうが）

「なえか様！どうされました？」

二階に到着すると予想通り、なえか様が壁に激突して気絶していました。

「こ、コガラシ！一体何が起こったんです？」

「うむ、ご主人の脳になんらかの問題が発生したのかもしれない。先程部屋の中で照明も点けず、月明かりで手紙を読もうとしていたのでな、手紙の差出人について話をしようと思ったら、急に奇声を挙げてな、部屋を飛び出した後、壁に走って自爆した」

「は、はあ」

うむ、全くの予想通りの展開ありがとうございます。

「コガラシさん、なえか様をお部屋に運んでベッドにでも寝かして差し上げてください。後なえか様は特に脳の病気という訳ではありません。詳しくは後で話しますが、原因はなえか様が受け取った手紙です」

「む、やはりあの手紙が原因か」

「ええ。と言ってもそれほど物騒な話ではありませんよ。まずはなえか様をお願いしますね。私はタオルを冷やして持って来ますね」

パタパタと一階に降り、洗面所に入ります。

さて、姉様とコガラシさんとはリビングでもお話ししましょうか。

「ふむ、つまり心配はいらんと」

コガラシさんに要するにあの手紙は只のラブレターであり、思春期女子としては（なえか様の反応はかなり純情だと思いますけど）他人に踏み込まれたくない領域である事を伝えました。

「しかし、あの反応は異常ではないのか？俺が話しかけても全く反応しなかったぞ」

本当にコガラシさんって女子の気持ちというものに疎いですね。少しは乙女の純情というものをわかってもらいたいですね。

「女の子というのはそういうものなのです。恐らくなえか様はラブレターを受け取ったのは初めてなのだと思います。それです。」

人生初のラブレターを受け取った夜ですよ。一人でじっくりこっそり読みたいというのは理解出来ますよ。

それを邪魔されたんですから混乱のあまり叫びだすくらいしますよ」

私ですか？貰った事なんてありませんが何か？

「むう、しかし」

まだ納得出来ませんか。

「仕えるべき主の心も理解出来ないようではメイドガイ失格です」

「う、うむ…」

最近はこれを切り札としてます。前回の騒動からコガラシさんは私にこれを言われると黙るのですよ。

うゝむ、なんだか私と姉様って北風と太陽みたいですわね。

厳しく接するよりも優しく接した方が、やはり人は言う事を聞いてくれるのでしょうか。

「こなゆき」のくせして太陽ってのも何ですが。

え？お前の言い方は決して優しくない？

言葉で心が傷付く事もある？

その辺は見解の相違というやつですね。

「こなゆきの言う通りです。

なえか様が何か相談されてきたならともかく、それまではそつとしておいて差し上げるべき：聞いているのですか？」

コガラシさんは例の鬼○郎アンテナ（もう、そう呼んでしまいましたよう）を伸ばして、電波を受信してます。

「む、ご主人に電話が：友人からか。」ラブレター”：”今朝の下駄箱”：”内緒”」

あのアンテナって何でもアリなんですわね。携帯の電波まで受信してしまうとは（とういか傍受、盗聴でしょうか）

「人の話しは聞きなさい」

ボグッ！

姉様：

ちょっと最近過激すぎませんか。

何です、その剣と呼ぶにはあまりに大きすぎる鉄塊は。

分厚くて大雑把で、どうみてもベル○ルクのあれですね。ありがとうございます。

いや、本当どこから出したんですか？

姉様は暗器使いという設定だったはずでは？

あとコガラシさんの首が90度横に傾いているんですが、恐すぎて直視出来ません。

「現在ではなえか様の周辺で組織だって動いているものはいないそうです。

あくまでも、なえか様には知られる事なく生活をお守りする事が我々に与えられた役目。

よってなえか様の学園生活に必要な以上の介入をしないよう厳命いたします。

よいですね？」

いや、よくないと思いますよ。ていうか話聞けてませんよ。

私これ以上この部屋にいるのは心臓に悪いので、退席させていただきますね。

後はお二人で存分にOHANASHIください。

パタン

そして、部屋をでてキッチンに向かう途中で、なえか様より声を掛けられ自室へと招かれたのです。

その後、なえか様よりラブレターを受け取った事を相談され、冒頭の状態へと至る訳です。

次回はなえか様の相談（というより一人語りですね）が一段落した辺りから、お届けしましょう。
それでは。

（あれ？ 考えてみれば、前話の冒頭の件まではまだ辿り着いてないんですね。

大丈夫なんでしょうか、このSS）

ご奉仕 そのじゅういち 乙女心を理解できないものは…なのですよ

(後書き

作者(以下作) 「おはこんばんちわ。一週間ぶりのご無沙汰です」

こなゆき(以下こ) 「みなさま改めまして、ご機嫌いかがでしょう
か。交代間近の主役、こなゆきです」

作「ん？前話の後書きか。引っ張んなよ、そんなもん」

こ「主役替えるというなら上等じゃないですか。とっととやっ
てく
ださいよ」

作「だから、いちいち前の話を引っ張るなよ。読者さんも忘れて
るよ。一週間も経ってんだから」

こ「ふう。しょうがないですね。折れてあげますよ。じゃあ今回
の話ですけど、あまり進んでませんね。本編でも私ちよつと言いま
したけど、まだ前話の冒頭まで繋がってませんよ」

作「それに関しちゃご免なさいとしかいいようがないなあ。俺今4
つ作品連載してるんだけど、ぶっちゃけこれが一番書きにくいんだ
よ」

こ「え！そうだったんですか！」

作「まあ、毎回恒例の愚痴なんだけど、本当難しいんだよ、この作
品」

こ「だったらいっそ本当に削除して書き直したらどうです？皮肉じ

やなくて主役替えるとか」

作「そこが我ながら面倒くさいとこだな。手間のかかる子ほど可愛いって云うだろ。書くのが難しい作品だけに書きたいっていう気持ちには四作中で一番強いんだよ」

こ「おおー」

作「技術がそれについてこないんだけどな」

こ「ああ…」

作「そんなこんなでまあこれから書き続けていくつもりだよ」

こ「ほほー」

作「そういやフブキのあれって間近で見てどうだった？これからちよつとずつあんなの増やしていく予定なんだけど」

こ「いや、本気で嫌なんですけど。考えてみてくださいよ。平和な家庭のリビングにいきなり撲殺死体や血塗れの大男が倒れてるんですよ。そして、その横では武器を手に微笑むメイドって何ですか、この光景」

作「燃えるし、萌えるじゃないか。正しい日本の二次元文化というものだろう」

こ「あゝちよつと反論しづらい」

作「というわけで次回以降も正しい日本の二次元文化を継承しつつ、

頑張って書いていきます。読んでくださった方ありがとうございます」

こ「…ええと、色々言いたい事はあるんですが、読者の方々にはいつも感謝しております。次回以降もどうやら私が主役らしいので、姉様、コガラシさんと共に頑張ってゆきます。ではまた次回まで、ご機嫌よう」

ご奉仕 そのじゅうに 乙女の会話は時に…なのですよ

皆さま 毎日を健やかに過ごすごですか。

富士原家に仕えるメイドのこなゆきです。

只今、なえか様のお部屋でなえか様と向かい合っております。

なえか様の相談という名の一人語りもそろそろ佳境に入りそうです。

「それで、それで、それで、恥ずかしいけど私こういうの初めてだから何をどうしていいのかさっぱりわからないの。

こ、こ、こなゆきちゃん。な、な、なんかアドバイスない？」

そう言ってジッと私を見つめて来られます。

両手は組んで胸の前へ。少し潤んだ瞳で熱く見つめられますと、少々照れますね。

「アドバイスと言われましても…別に何もしなくてもいいんじゃないんですか。

こういう言い方もあれですけど、あくまでなえか様は手紙を受け取った立場ですから、そんなに気を使う必要もないのでは。

極端な話、別にそこに行かないって選択肢もあるんですよ」

「え、だ、だってそれは」

「まあ、あくまでもそういう選択肢もあるという事ですよ。

折角お手紙をいただいたのですから、返事をどうするかは兎も角待ち合わせ場所に行くのが礼儀に叶っているとは思いますがね」

「そ、そうでしょう」

「ですが、あくまでも此方は先方の事情に合わせているわけですから、ある程度の心の余裕はあっていいと思うのですよ。

告白を聞いてあげる、というのは言い過ぎかもしれませんが」

誰かも言ってましたが、恋愛は綱引きだそうですよ。イニシアチブをどちらが握るか、特に最初が肝心だそうですよ。

「う、うーん。そういうもののかなあ」

「まあ、何事も初めては緊張するものですしね。あまり思い悩むなとは申しませんが、そろそろお休みになってはいかがです？ 本当に目の下に隈でも出来ますよ」

う。

なえか様はそう唸って顔を両手で隠されました。
いや、まだ出来てませんよ。

「眠れないようならホットミルクでもお作りして、お持ちしますがどうされます？」

意外に馬鹿にしたものでもないのですよ、牛乳も。まあ何事も気の持ちようと言いますからね。

飲んだら眠れそうと思えば、青汁でだって眠れるかも知れません。

私は試す気はありませんけどね。

「あ、あのさ、こなゆきちゃん。頼んでもいい？」

「ええ、構いませんよ。すぐ作ってお持ちしますよ」

そう言って立ち上がろうとした私を、

「あ、ああー、違うの。ミルクを頼んだんじゃないくて。えっと、あのー」

はて？何か頼みにくい事なんでしょうか。随分言い淀んでおられるようですが。

「あ、あのね。私考えたんだけど。あの、さ」

改めて座り直して、なえか様の言葉を待っていたのですが、本当に言いにくそうですね。

ふむ。主の苦境を救うのは仕える者の義務。

ここは助け船を出すとしましょう。

「なえか様。私達は貴女にお仕えする為に参ったものです。

なえか様がご自分の環境の変化に戸惑われている事は承知しておりますが、どうぞ何なりとお申し付けください。

私達にとって主から命令を受ける事は誇りであり、主の望みを叶える事は喜びです。

どうぞお気になさらず」

なえか様。ポカンとなさらないでください。私も仮にもメイドとしての教育を受けた者。

これくらいの事は言えますとも。

「それでも気になるのでしたら、同じ家に住む同じ年の女の子に頼み事をすると考えられてはいいかがですか？
そっちの方が気楽でしょう」

パチリッ

ここでウインク一つ。

うむ。我ながら中々の垂らしぶりですね。
女の子はギャップに弱いと言いますが、
なえか様。顔赤いですよ。

「あ、あの、じゃあ思い切って頼むんだけど」

「ええ、どうぞ」

どんなお悩み、頼み事でもドンと来いですよ。

「わ、私に告白してくれない！」

……………は？

「あ、あのね。シミュレーションっていうの？やっぱいきなり告白とかされても困るし、だから一回予行演習しときたいの。こ、こんな事頼めるのこなゆきちゃんしかいないし」

あゝそう来ましたか。
なるほど、なるほど。

まあ、確かに幸助様やコガラシさんには頼めないでしょうしね。（

それぞれ頼めない理由は違うでしょうけど)

フブキ姉様にも、まあ頼めませんか。

ぶっちゃけそこまで信頼関係は築けてないでしょうね、まだ。

その点私とは色々話もしましたしね。一緒にゴミの山に押し潰された仲でもありますしね。

(他にも一緒にされた事があるだろうって？何の事でしょう。まるで記憶にありません)

まあ、しかし告白ですか。正直意味があるとは思えませんが、冷たくあしらうのも不忠というものでしょう。

「分かりました。そのお役目引き受けさせていただきます。では具体的にはどのようなようにいたしましょうか」

「え、あ、そ、そうね。

う、うーん。こ、ここはオーソドックスな感じでお願いしようかな」

オーソドックスですか…

「でしたらシンプルに『貴女の事が好きです。付き合ってください』とかでよろしいですかね」

「う、うん。よろしいと思います」

いや、そんなに力強く首を振らなくても。

後、顔真っ赤ですよ。

「それではいきますよ」

「ま、待って。まだ心の準備が！」

いや、心の準備をするためのシミュレーションでは。

そんなに緊張されなくてもいいと思うんですが。

「はあはあ。う、うん。大丈夫。

じゃあ、どうぞ」

そんな真っ赤な顔で大丈夫と言われても…

何だか私まで緊張してきましたよ。

「折角ですから二人とも立ちましようか。その方がより雰囲気出るでしょう」

「そそそそ、そうだね。そうしようか」

二人立ち上がり、改めて向き合います。

ふー

一度息を吐いて、目を閉じ、ゆっくりと目を開け、なえか様の目を正面から見ます。

…緊張されていますね。

やっぱりシミュレーションも必要だったかもしれませんね。

一拍間を置き、ゆっくりと、でもはつきりと伝えます。

「あの、貴女の事が大好きです。付き合ってください」

……言いました。何気に人生初の告白だったりします。いや、あくまでこれはなえか様の為のシミュレーションであり、本気の告白ではないですけどね。

ただまあ、いい加減にするのもどうかと思い、私なりに気持ちちは入れてみたつもりですが、なえか様はどう…
なえか様？

なにやらお顔の表面温度が上がってませんか？

あの、私の気のせいでしょうか。目がなんだかグルグル廻ってらっしゃいませんか？

え、えゝと身体が震えてらっしゃるようになって！

パターン！！

わゝ！

な、なえか様！

ちよ、直立不動のまま倒れられるなんて！

：結局その後、姉様やコガラシさんまで部屋に飛び込んで来られて、大変な騒動となりました。

幸い床にクッションが置いてあったので、深刻な怪我などはされなかったのですが。

ただ気絶状態から目を覚まされたなえか様が、私を見るなりまた顔を真っ赤にされたので、コガラシさんだけでなくフブキ姉様までなえか様の心配をしていました。

なんだか開けてはいけない扉を開けてしまったような気がする今日この頃です。

ご奉仕 そのじゅうに 乙女の会話は時に…なのですよ (後書き)

このサイトに集う方達はみんな仲間だと思っています。作品を書くことは仲間と繋がりを持つ為の手段です。今回は悩みましたが、作品を投稿いたします。仲間の無事を祈っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1771q/>

仮面のメイドガイの二次創作を読みたいけど誰も書かないから俺が書いてみた

2011年3月31日00時54分発行